

## 『狩人』

桑原 紀子

11月のある日、自転車で走っていたら、住宅地を流れる小さな水路の脇に小学生の男の子達が4人、熱心に水面を覗き込んでいます。3年生位でしょうか、並んだ背中から真剣さが溢れています。住宅地の開発に伴って作られた人工の小川に、そんなに心を捉えるものがあるのでしょうか。

自転車を止めて、私も小川を覗いてみました。動いている物はいません。水の流れがあるだけです。子どもたちはそれぞれ小さな網を持っていて、目を凝らしています。

「アッ、いた!」「そこ!」

2人が網を差し入れて、水底の小石の下を探ると、ひとりの網に、獲物がかかったようです。

泥を洗って見せてくれました。小さなエビです。バケツに入れて、「スジエビと、黒メダカ」と、教えてくれました。今度は別の子どもが、泥の中からザリ



ガニを掬い上げました。皆、ヤッター!という顔です。獲物は小さくても、狩猟採集の興奮と喜びは、同じです。

私は子ども時代を思い出しました。あの頃、田舎の小川には、フナやハヤが黒く群をなして泳いでいました。棒で石の隙間を突きながら下流に網を構えると、隠れていたフナが飛び出して、網のなかに入ります。膝まで流れに漬かりながら、素早い黒い影を追う時のドキドキする一瞬は、今でも心が熱くなります。

作られてから数年経つこの人工の水路にも、生き物の姿が現れて、それを子どもたちは見逃さないのです。

「写真撮らせてね」というと、ザリガニを突き出して見せてくれました。それから、子どもたちはバケツと網を手手に、狩人のように、小川に沿って移動して行きました。